
救済の進軍

小田多井夕画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救済の進軍

【Nコード】

N3554Z

【作者名】

小田多井夕画

【あらすじ】

召喚術で異世界の生物や物質を召喚して発展した世界。その世界で起こった大戦の最中、大国が発動した極大召喚術が、敵国の介入により暴走、無限に湧き出す魔物により、世界に未曾有の召喚災害が訪れた。人々は都市の城壁の内側にひきこもるような生活を余儀無くされることとなる。そんな中、インテシアという都市の領主の娘として生まれた、エリア・メインティアルは前世である地球での記憶と、その更に前の前世である別の異世界の魔王であった頃の一部の力、更には父親から受け継いだ大召喚術をもって、部下たち

とともに世界を救うための進軍を始めるのだった。

序章 始まりの日

エリア・メインティアルは振り向いた。自分がここまで集めた直属の部下たちへ振り向いた。彼らの存在が、彼女の仮説を肯定し、そして、彼らの働きがエリアを望む位置まで推し進めてくれた。エリアは彼らに向かってうなずき、壇上へ向かって足を踏み出す。その長くまっすぐな白髪をゆらしながら、一段一段踏みしめてあがっていく。そして、壇上に立ったエリアの目に、広場を埋め尽くす人々が飛び込んできた。その中の多くの人々が笑っている。表情に希望の光がもっている。人々の表情の中にエリアへの信頼と信用と支持する意思が見て取れる。エリアはもしかしたらこの後、自分がそれを壊してしまうかも知れないということを考え、しかし、その考えを押さえ込む。そして、自分の目的のため、自己の感情を希望へ向ける。多くの人がついてくるのはより輝かしい希望にだと、エリアは知っていたから、無理やり感情を希望へ向け、演説を始めた。「領民たちよ！今日は良くぞあつまってくれた！これだけの人々が、私が話すこの都市の未来に興味を持っていてくれることを嬉しくおもう！だがすまない、今回の演説はこの街の未来を話すものではない。今回の演説で、私が諸君らに伝えたいのはこの世界の未来だ！諸君も知つての通り、大戦中であつた68年前、カーデイス国の無限召喚式がレティロカ帝国の術式介入の結果暴走し、未曾有の召喚災害となつた！それにより人間は城壁の内の閉じた都市でしか生活できず、じりじりと滅びへ向かつて進んでいつている。都市内で確保できる資源はいずれ枯渇するし、人口も減り続けている。私の父であるクロード・メインティアルが領主を務めていたときより、皆にも協力してもらい、都市全体で節制と新資源の発掘に力を注いできた。だからこそ、このインティアは68年間も耐え続けることができた。資源を備蓄してきていたからこそ、魔物たちの不意の襲撃によつて砕かれた城壁を再建することもできた。だが！このまま

同じことを続けていても問題は解決しない！城壁の外では無限召喚により魔物が増え続け、城壁の内では人も資源も減り続ける。仮に召喚がとまったところで外の魔物たちが消えることもない。このままではいずれこの街は滅びてしまう！そして、それは当然この街だけではないだろう！世界全体で生き残っているすべての都市が、同じような現状におかれてはいるはずだ！この世界危機である召喚災害に対処するには、この世界の全人類で挑むしかない！そのために私は他都市へ向けた進軍を開始する！」

響き渡るエリアの声に、彼女の領民たる人々は様々な反応を示した。神妙な顔でうなづくもの、驚きのあまり啞然として立ち尽くすもの、顔を恐怖にゆがめるもの、大きな感情の渦がその広場に渦巻き始めようとする。だが、エリアはその前に、感情が爆発する前に、更なる言葉をつむいだ。

「私が領主の座についてから17年！この進軍のために多くのことを準備してきた！軍備の強化はもちろん、農業改革や魔物の肉の食用化加工の効率化といった食料問題の改善、火薬の研究と銃の発明による、非召喚術者への対魔物戦闘能力の付与、召喚術式研究による召喚術の効率上昇。それらはすべて、私がこれからの進軍のためにすすめてきたものであり、諸君らもよく知る、私の出してきた成果だ！これだけの成果をだし、この街は今のままでも、かなり長く耐えることができるはずなのだから、わざわざリスクを侵して遠征する必要はないのではないか、というものがあるかもしれない。だが、この進軍は今しかできない！これまでの状況では、進軍を始めるには力が足りなさ過ぎたし、これ以降ではこの街の力はじりじりと衰えていくだろう！進軍するにはいましかないのだ！」

諸君は認めていてくれるはずだ！たった5歳で領主を継いだ私が、多くの悪意に屈さず、常に成果を挙げ続けてきたと！その信頼をもう少しの間でいい、私に向けていてくれ！私はこの世界を必ず救い出す！未来を生きるものたちへ希望の芽を残すために！未来を生きるものたちへ絶望の種を残さないために！私は兵たちとともに命を

賭して世界を救い出すと誓う！だから頼む！諸君の希望を、諸君の未来を、諸君の命を……私に託してくれ！」

強く語ったエリアは、額に汗を浮かべていた。細く、ラインの美しい肩が、軽く上下している。

紡ぎだされたエリアの言葉、その言葉を領民はすぐには受け入れられないだろう。それでもエリアの言ったように、このままでは世界は滅びる。進軍のタイミングは今しかない。だからこそ、民に受け入れさせなければならない。ゆっくりと死に行くのではなく、成功率の低い手術を受けるような選択を。だからこそそのエリアの演説だった。演説によって領民の心は揺れている。その状況であるからこそ使える強硬手段が、エリアにはあった。

『魔眼』

遙か昔、エリアの魂の器が持っていた「他者を支配する魔眼」その名残。いまやかつてのような力を持たぬエリアの体では、この広場の者達のうちの一部を催眠術にかけるのがやっとだ。しかし、直接一対一で見たものならば、ある程度なら操ることが可能だった。

「……そうだ、このままじゃこの世界はジリ貧だ！領主様の言うとおりだぜ！みんな、ここで死ぬのを待つよりは、希望に向かって進軍しようじゃないか！」

「おお！そうだ、俺たちは魔物にやられるだけじゃねえ！今なら俺だって銃を持ってたたかえる！進軍だ！他の都市のやつらも助けて、世界も救ってやろうじゃねえか！」

広場の中心あたりで上がった言葉に呼応するかのように、広場のあちこちで声が上がる。その声は心の揺れた領民たちにすぐに伝染し、数十人、数百人、数千人と広がっていく。

——ごめんなさい。

エリアは心の中で謝る。

最初に声をあげたものたちは、演説より以前にエリアが魔眼で支配下に置き、この広い広場の要所に配置したものたちだった。エリアは彼らが思っていないようなことを強制的に言わせたことに、罪

悪感を感じる。

——私に罪悪感を感じる権利なんてないのにね……

広場に集まったものたちの大勢は決した。彼らの意思は、この街の12万人の人々の多くに伝播するだろう。これで、ようやくエリアは一步を踏み出す準備が整った。

「おつかれさまです、エリア。魔眼の効力維持と演説でお疲れでしょう。あとは私が……」

後ろを振り向くと、自分の最古参の直属部下であるリグリア・エーデイスが壇上へ上がってきていた。彼が、進軍に向けた詳細日程や細部の情報を、領民へ伝える役割となっている。

「ごめんなさいね、あなたに大変なお仕事を押し付けて」

「元魔王ともあるうお方に心配していただき光栄です。大丈夫ですよ、ここはまだスタート地点ですからね」

「元魔王といっても、魔王の後に一度ただの人間はさんでるんだけどなあ……」

その日が始まりだった。

エリア・メインティアルと八人の直属部下を中心とした、世界救済のための進軍、その始まりの日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3554z/>

救済の進軍

2011年12月12日02時53分発行